

# 「マジック <e>」のマジック

— 英語における綴り字と発音の対応関係の歴史 —

松 瀬 憲 司

## The magic of “magic <e>”:

The history of spelling-sound relationships in English

Kenji Matsuse

(Received September 30, 2020)

In Present-day Standard English, the spelling of a word has not reflected its pronunciation as straightforwardly as that in earlier periods of English. That is, it has not been principally phonetic any more, in spite the fact that without a doubt the writing system of English started phonetically enough. Why? The culprit crucially responsible for it seems such silent letters as <e> in *spite*, <gh> in *straightforwardly* or <b> in *doubt* in the above sentences, although among them the <e> in *spite* is what we call “magic <e>” and it has now become a rather useful pronunciation guidance for both native speakers and foreign learners of English. These silent letters were born in a complicated situation where began not only standardization of English along with the advent of the printing technology, but also the Great Vowel Shift (GVS) and other phonological changes following it inside English itself. In other words, while spelling tended to be fixed, pronunciation continued to change: hence a very big gap between them. Due to this inconvenience educators as well as scholars proposed their own ideas of spelling reform, but none of them could fully be realized except Noah Webster’s nationalistic and patriotic proposal for American English, with which Japanese learners of English are very much familiar: e.g., *labor*, not *labour*; *jail*, not *gaol*.

**Key words :** phonetic, silent letter, magic <e>, standardization, GVS, spelling reform

### 1 はじめに

「マジック <e>」とは,<sup>1)</sup> 現代標準英語 (Present-day Standard English: PSE) において, 通常 Consonant (子音)-Vowel (母音)-Consonant-<e>, 即ち「CVCe 構造」<sup>2)</sup> を持つ単語の最後の「綴り字」である「発音されない (silent) 母音 <e>」のことを指すが, この <e> の有無によって, 当該の単語の発音が大きく変化することはよく知られている. この <e> に「マジック」が冠される所以である. 例えば,

(1) a. CVC: can /kæn/, fin /fin/, tub /tʌb/, rob /rɒb/, pet /pet/

b. CVCe: cane /keɪn/, fine /faɪn/, tube /tjuːb/, robe /roub/, Pete /pi:t/ [人名 Peter の通称]

このように, 語尾にたった 1 文字 <e> を付加するだけで, あら不思議, 短母音が長母音や二重母音 (diphthong) に様変わりする. もう少し正確に言うならば, マジック <e> のマジックにより当該の母音がすべて「アルファベット読み」になるのである<sup>3)</sup>. 誠に整然とした見事な変身ぶりではないか.

他方, そもそも英語の書記体系は, 出発点の古英語 (Old English: OE) では, 典型的な「表音文字 (phonogram)」であるルーン文字 (runes) やラテン文字 [= ローマ字 (Roman alphabet)] を利用した, 「表音的な (phonetic)」体系であったから, 所謂「黙字 (silent letter)」は原則的に想定されていなかったと考えられる. ではなぜ, このマジック <e> の如き不可思議千万なものが PSE に存在する事態に至ったのか. 本稿では, その成立プロセスを再検討することで, 英語において, 綴り字と発音の対応関係がどのように変遷してきたのか, その波瀾万丈の歴史を改めて振り返ってみたいと思う. 本稿の構成は次の通りである. 次節ではまず, OE や中英語 (Middle English: ME) といった中世期英語での黙字の存在を確認する. 続く 3 節で, 近世の欧州文芸復興 (ルネッサンス [Renaissance]) を経て初期近代英語 (Early Modern English: EModE) 期に確立する, 英語の

「標準化 (standardization)」とそれに絡む幾つかの現象を議論した上で、4 節では、その後に巻き起こった「綴り字改革 (spelling reform)」を取り上げる。そして 5 節で、英語が到達し得た書記体系の現段階での姿をまとめることにする。

## 2 OE・ME に黙字は存在したのか

5 世紀にアングロサクソンが大陸から海を渡ってイングランドに OE (の原形) を持ち込んで以降、彼らには、そのオリジナルの書記体系として *futhorc* と呼ばれるルーン文字アルファベットがあった。これは、大陸でゲルマン人に共通して使用されていた基本ルーン文字を OE の音韻体系に合うように改変したものである。その後彼らは全面的にラテン文字アルファベットに乗り換えることになるのだが、その端緒として明らかに、6 世紀にローマからの使節によって南東部ケント王国で始まり、7 世紀にはアイルランドからの使節による北部ノーサンブリア王国の改宗を経て、その後イングランド全土に波及した、アングロサクソンの「キリスト教への改宗」があったことは間違いない (Upward and Davidson (2011: 18))。あの「キリスト教 = ラテン語 = ラテン文字」の図式である。もちろん、OE とラテン語とでは音韻体系が違うので、新たな書記体系をそっくりそのまま OE に導入するというわけにはいかなかった。そこでアングロサクソンたちは、使い慣れた幾つかのルーン文字およびラテン文字を改変して創造した文字を、イングランド移住後新たに取り入れたラテン文字アルファベットに加えることで何とか対処しようとしたのだった。<sup>4)</sup>

さて、OE における黙字についてである。果たして、OE の書記体系はどの程度「表音的」だったと言えるのか。特に黙字に関して言えば、以下の (2) を参照する限り、ある特定の環境での <e> が所謂黙字に相当すると思われる。

(2) a. *sc* usually had the sound of M[oder]n.E[nglish]. *sh: scip* 'ship', *fisc* 'fish'. This sound was often written *sce: sc(e)olde* 'should', *bisc(e)op* 'bishop'.<sup>5)</sup> —Davis (1953<sup>9</sup>: 4)

b. The original sound of *ie* and *īe* is not known with any certainty. ... they represented diphthongs .... But by King Alfred's time *ie* was pronounced as a simple vowel (monophthong), probably a vowel somewhere between *i* and *e*; *ie* is often replaced by *i* or *y*, and unstressed *i* is often replaced by *ie*, as in *hiene* for *hine* [= PSE direct objective 'him']. Probably *īe* had a similar sound.

—Mitchell and Robinson (2012<sup>8</sup>: 15, n.1)

そういう意味では、マジック <e> への萌芽が既に OE 期に見られるとも言えそうだが、これはあくまでもオプションであること ((2a))、またその後の音韻変化による黙字化現象であること ((2b)) を考えれば、OE の書記体系は「本質的に」十分表音的であったと言っていいのではないか。<sup>6)</sup>

では次に、ME での状況を見てみよう。OE で新たに導入された、ラテン文字アルファベットには元来存在しなかった <ƿ>, <æ>, <ð> は早々に廃棄され、<þ> と <Ʒ> のみが一部地域で保存されていたが (註 4) および Everson (2009<sup>2</sup>) 参照)、最終的にそれらは <th> と <g(h), y> といったラテン文字の二重字等に完全に置き換わった。そして、以下の (3) が示すように、完璧とは言えないまでも ME もまたほとんど表音的だったと言ってよく、黙字の存在も、弱強五歩格などの、韻文における韻律 (meter) の制約に起因する、強勢のない語末の <e> の発音の有無が、単語には固有でない形で確認されるくらいで (これもある意味マジック <e> への足掛かりと言えるかもしれないが)、「明らかな」なものは認めがたいようだ。

(3) Middle English writing was not phonetic in the sense of having one and only one written symbol for each sound, but there are relatively few words in which a letter has no corresponding sound in the spoken language, ... —Upward and Davidson (2011: 76)

つまり、一文字一音の原則に従わない二重字の存在を例外とすれば、ME の綴りは概ね表音的に処理できていたと考えられる。<sup>7)</sup> ということは、OE・ME 期には所謂黙字はほとんどあり得なかったことになり、むしろ有益なマジック <e> の存在だけでなく、PSE が呈する「黙字汚染」とでも言うべき異様な状況は、ModE 期以降生じた「怪」現象であることが確かめられる。

## 3 標準化への道

起源的に見て十分ゲルマン的であった OE から始まった英語だが、11 世紀以降フランス系の王統で接ぎ木

されたために、支配者階級が使う上層語 (acrolect) が、「外国語」であるフランス語となった ME 期イングランドは、その間一般民衆が使う下層語 (basilect) に成り下がった英語の相対的地位低下に伴い、野放し状態である地方方言の時代に突入していた。Trousdale (2010: 82) は次のように言う。

- (4) ... dialect variation was salient in Middle English (ME). ... variation was the norm in ME, even in fairly formal writing. ... variation was tolerated more readily than it is in today's English. One thing that stands out about ME is the great diversity in the written language.

ME のキーワードは、まさしく「バリエーション」と「多様性」である。Crystal (2012: 110) は何と 60 もの night の ME 綴りを *The Oxford English Dictionary* から指摘している。

しかしながら、フランスとの百年戦争 (Hundred Years' War) 勃発を契機に英語の本格的な反転攻勢が始まり、また、首都ロンドンの一層の繁栄も相まって、その結果、ME 末期あたりから、東中部 (East Midland) 方言を核とした標準形 (standard) が出現するに至る。ちなみに、van Herk (2012: 12) による標準形の定義は以下の通り。

- (5) The codified variety of language, that is, the language taught in school, used in formal writing, and often heard from newscasters and other media figures who are trying to project authority or ability.

つまりそれは、成文化された、教育 (や公的機関)・正式な書き言葉および各種メディアで使用される言語変種のことである。<sup>8)</sup> またこの定義の後半部では、「話し言葉」の標準形についても言及されているが、当時標準形はまず、以下のように「書き言葉」から始まった。

- (6) ... there emerged toward the end of the fourteenth century a written language that in the course of the fifteenth won general recognition and has since become the recognized standard in both speech and writing.

—Baugh and Cable (2013<sup>6</sup>: 187)

上記 (4) や (5) でも formal “writing” と記されているように、書き言葉、就中「綴り字」を固定することこそが ME 地方方言無法地帯から脱却し標準化へと向かう第一歩だったと言っていい。そしてそのことを文字通り技術面で全面的に後押ししたのは、ルネッサンス三大発明の一つ、ドイツのヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg [1398-1468]) による「活版印刷術」であった。イングランドには、1476 年にウィリアム・キャクストン (William Caxton [1415~22-1492]) によって持ち込まれている。現代に当てはめるならば、差し詰めそれは、インターネット革命にも匹敵するこの技術革新により、ME 期までの「手書き (原稿)」（まさに manu [手による] -script [筆記]) 故にそれまで様々なバリエーションが生じ得た綴り字だったが、コピーを大量生産できる活字に組むという作業を通して一気に統一共通化への道が開けたのである。

だが、ここに一つ大きな落とし穴があった。「大母音推移 (Great Vowel Shift: GVS)」<sup>9)</sup> およびその後も引き続いて起こった「音韻変化」である。固定化に向かいつつあった綴り字とは裏腹に、実は ME 末期から、強勢のある長母音の調音位置が一斉に変化し始めていたのである。その原因は未だによく分かっていないが、とにかく当時綴り字が固定されるトレンドにある一方、発音は確実に、そして長い目で見れば、大きく変化し続けたのだ。その結果、綴り字と発音の対応関係に決定的な乖離が生じることになり、この GVS を経て最終的に、<a> /a:/, <i> /i:/, <ou> /u:/,<sup>10)</sup> <o> /o:/ の長母音は、/ei/, /ai/, /au/, /ou/ の二重母音に (このため英語では、欧州の言語としては珍しく、母音 1 文字が二重母音を表すことになった)、長母音 <e> /e:/ は調音位置が一段上昇し、/i:/ になってしまった。

さらに ModE 期には、上記のような強勢のある長母音がラディカルに変化すると同時に、それとは対照的に強勢のない母音、特に語尾に <e> として現れる曖昧母音 (schwa: /ə/, “the ‘neutral’ vowel” [Crystal (2018: 117)]) が最終的に無音になる現象が広がった (これは、前節で述べた、韻文での韻律上の制約のために、当該の綴り字が発音されたり、されなかったりしたこともその最終的な無音化に繋がった可能性がある)。にも拘わらず、綴り字の方はどんどん固定化の方向に進んだために、例えば、(7a) の name の <e> のような黙字として残留することになったのである。つまり、(7b) に見られる曖昧音化のプロセスを経て最終的に無音・黙字になることで、マジック <e> の下地は着々と固められつつあった。

- (7) a. OE nama /na:mɑ/ > ME name /na:mə/ > EModE name /nɛ:m/ > /ne:m/ > PSE name /neim/<sup>11)</sup>

b. <a> /a/ ‘full value’ > <e> /ə/ ‘schwa’ > <e> φ ‘zero’

さらには、この音韻変化は母音に留まらなかったのである。ModE 以降、子音の一部でも無音化・黙字化を含めて音韻変化が進行していたが、悲しいかな、それは綴り字が固定化された後に起こったために、上記の語尾の <e> 同様、その綴り字自体はしばしば温存され続けた。例えば、

(8) a. OE *cniht* /kniçt/ > ME *knight* /kniçt/ > ModE *knight* /nait/

b. OE *ruh* /ru:x/ > ME *ro (u) gh* /rux/ > ModE *rough* /rʌf/

上例 (8a) に見られる, OE の語頭子音結合 <cn> /kn/ は, 発音はそのままで ME <kn> に受け継がれたが, ModE 以降当該の /k/ は発音されなくなった (ドイツ語では未だに *Knecht* /kneçt/ と発音されているけれども)。また, 語中や語尾に現れる, OE <h> /ç, x/ は, ME では, フランス人写字生によって二重字 <gh> に置き換わったが, (8a) のように, (イングランド南部では 17 世紀までに [Cruttenden (2001<sup>6</sup>: 66)]) 黙字になる一方, (8b) では, /f/ の二重字として現在機能していることが分かる。Horobin (2010: 63) によれば, (*doughnut* [= *donut*]) の *dough* /dou/ と (*plum-*)*duff* /dʌf/ のように, 同一語源語の OE *dah* /da:x/ から, PSE においては, 無音の <gh> と /f/ 音の <f> を使用した二通りの綴りに分化した例も見られるという。音韻変化の実態を目の当たりにした思いがする。

上記の音韻変化とは違う形で, この標準形創成期に生じた, 綴り字・発音の相反に拍車をかけたのは, 他にもないルネッサンスという時代の趨勢だった。「ルネッサンス (Renaissance = Rebirth [再生])」とは「古典への回帰」を意味したからである。それは借入語, 特にフランス語に対する「語源的綴り (etymological spelling)」への過剰なほどの拘りとして結実した。すなわち ME 期に, 前述のようなイングランドの二重言語社会構造上, フランス語から大量の語彙が英語に流れ込んできていたが, それらを形態的にその源泉であるラテン語にまで遡らせようとしたのだった。見馬 (2018<sup>2</sup>: 122) は, これには主に次の二通りの展開があったとしている。

(9) a. M[ediaeval]L[atin] *solidarius* > O[ld]F[rench] *soudier* > ME *soudiour* > ModE *soldier* /souldʒə/

b. L *dubitare* > OF *douter* > ME *douten* > ModE *doubt* /daʊt/

(9a) の *soldier* では, 中世ラテン語の語源に遡って <l> が復刻されたが, その発音 /l/ もまた同時に復活した。一般的感覚では, これは当然であろう。他方 (9b) の *doubt* では, 語源にある <b> を復活させておきながら, その発音 /b/ 自体は無視された。つまり, この <b> はハナから黙字として挿入されたのである。見馬 (2018<sup>2</sup>) に言わせれば, この後者の改変は綴り字を徒に複雑化したことになり, 「罪が重い」。なるほど /bt/ という子音結合が発音しにくかったから黙字にしたのだ, という言い訳も聞こえてきそうだが, それならばより語源に忠実でなおかつ発音可能な \**doubit* という形にすればよかっただけのことである (ただし, Horobin (2010: 64) が指摘するように, シェイクスピアは *Love's Labour's Lost* [1594] の 5 幕 1 場で, 空論家のホロファニーズに, “I abhorre ... such rackers of ortagriphie, as to speake dout *sine* b, when he should say doubt [/daʊt/];” とむしろ黙字の <b> を積極的に発音することを推奨させているが<sup>12)</sup>。従って, (9b) は非常に中途半端な語源再生であり, やはり罪は重いと言わねばならない。

そしてこの語源礼賛による綴り字修正の異様な風潮は, 何と借入語のみならず, ついに本来語をも巻き込むことになる。見馬 (2018<sup>2</sup>: 122) は, 上例 (9) に続けて, 次の *island* の例を指摘する。

(10) a. OE *igland* /ijland/ > ME *iland* /i:lənd/ > ModE *island* /aɪlənd/

b. L *insula* > OF *isle* > ME *isle* > ModE *isle* /aɪl/

c. L *insula* > OF *ille* > ME *ile* → ModE *isle* · Mod[ern]F *île*

(10a) より分かるのは, 本来 *island* の語源には <s> など全く存在しなかったということだ。従って, この <s> は, 同義であるフランス語借入語 *isle* に存在していたが故に ((10b)), <sup>13)</sup> 類推 (analogy) 作用によって持ち込まれた明らかな余計者なのである。ただ (10c) に示したように, この <s> は, 本家の OF において改めて復元されたのであり, 実際 <s> を欠いたままの OF 形からの ME 借入形も散見され, 英語での発音はこちらの形態がベースになっていると思われる。そして最終的には, 現代フランス語では, *île* という形態に落ち着いた。これは, <i> の上に「アクセント (accent [circonflexe])」符号を付加することで, かつてその直後に <s> が存在していた歴史的事実を文字に頼らずに表示しているのである (註 5) の「ドイツ語における発音弁別符号ウムラウト」に関する記述を参照)。

次のようなより複雑な綴り字修正の例も Crystal (2012: 157-158) が指摘している。それは, *author* と *authority* の <th> である。

(11) a. L *actor* > OF *auto(u)r* > ME *auto(u)r* > ModE *author*

b. L *auctoritas* > OF *autorite* > ME *autorite* > ModE *authority*

c. L *authenticus* > OF *authentique* > ME *autentik* > ModE *authentic*

今度は両者ともに, その源泉であるラテン語にも <h> は存在していなかったにも拘わらず, 英語では <th>

の綴りになっているのである。これは、どうやらそれらと意味的に類似する *authentic* の存在に気づいた者 (Crystal が言うところの *Latin-aware writers*) がいて、確かに借入先の OF *autentique* では <h> は存在しないが、その大本のラテン語にはそれが存在していることを突き止めたことから、*autentik* だけでなく、そこからの類推によって、*auto(u)r* と *autorite* にも <h> が挿入されたい。そもそもラテン語でも *authenticus* は、古典ギリシア語 *αυθεντικός* [*authentikos*] を借入したものであったので、ギリシア文字の <θ> を <th> [tʰ] (帯気音付き [t]) で正確に転写していたのである。ただ英語の場合それは、/θ/ の発音の二重字として捉えられている。改めて英語における <th> と /θ, ð/ の結びつきの強さを思い知らされるではないか (ただし、*Thames*, *Thai*, *Thomas* 等の固有名詞では /θ/ ではなく /t/ であるが)。

このように、英語標準形の創造は、綴り字に何より望まれた安定感をもたらす一方、言語の宿命としての絶え間ない音韻変化と術学的な「装飾」とも言える人為的改変によって、綴り字と発音の乖離を一層助長した側面もあったと言え、これは何事においてもそうだが、「固定化」が抱える呪縛に絡め取られてしまったと言っている。

#### 4 綴り字改革騒動

そのような中、16 世紀に所謂「綴り字改革 (spelling reform)」の必要性が声高に叫ばれるようになったのは、ある意味当然の成り行きであった。では、Horobin (2010) と Freeborn (2006<sup>3</sup>) を中心に当時の百家争鳴の喧噪ぶりを振り返ってみよう。

まず、ジョン・チーク卿 (Sir John Cheke [1514-1557]) である。Horobin (2010: 65) は、“his desire to tidy up the problems presented by final <e>” と指摘しており、早くも 16 世紀において既に語末の <e> が問題視されていたことが窺われる。チーク卿の提案は、

- (12) a. *taak* 'take', *mijn* 'mine', *aloon* 'alone'; *giv* 'give', *som* 'some'  
 b. *cām*, *cam* 'came'; *giue* 'give', *have* 'have', *sōm* 'some'

(12a) のように、無音の語末 <e> は発音されないのだから全て除去し、長母音／二重母音で発音される場合のみ、その母音字を重ねて表すというものであった。しかし、自身が提案する綴り字法で綴り直された「マタイによる福音書」の抜粋を見てみると、母音字を重ねるのではなく、<a> のような発音弁別符号付き文字が現れていたり、短母音語での語末 <e> 未削除例も散見され ((12b)), 統一感のなさを露呈してしまっている。発想としては、非常に整然としたものだけに、きっちりと運用すればそれなりに利点も多かったようにも思えるが、事実この提案は取り入れられることはなかった。

続くトマス・スミス卿 (Sir Thomas Smith [1513-1577]) の場合は、極端なアナクロニズムに走ってしまっている。彼は、<g> のような複数の発音を持つ子音字の存在がどうしても許せなかったらしく、昔使われていた文字を取って引っ張り出して来て「一文字一音対応」を達成させようとしたのだった。

- (13) <g> /g/, <ȝ> /dʒ/, <c> /tʃ/, <k> /k/, <ð, Δ> /ð/, <þ, θ> /θ/

(13) から、彼は OE・ME 期のルーン文字や改変文字等だけでなく、何とギリシア文字まで導入しようとしていたことが分かる。もちろんこのような過激な案が採用されることはなかったが、実は、この問題意識は PSE でも依然として未解決のまま持ち越されており、<g> は、/g/ か /dʒ/ かそれとも *reign* /rein/ などの無音かといった、特に外国人英語学習者を悩ます問題であり続けている。<sup>14)</sup>

次に登場するのは、ジョン・ハート (John Hart [died 1574]) である。Freeborn (2006<sup>3</sup>: 307-308) が述べている以下の (14a) から読み取れるのは、徹底した「一文字一音主義」だ。

- (14) a. Hart apparently believed that a reformed spelling, in which there was only one letter for each sound, would in time put an end to social and regional dialectal accents, and “bring our whole nation to one certain, perfet [= perfect] and general speaking.”  
 b. bring our hōl nasion tu o:n serten, perfet and general spēking<sup>15)</sup>  
 c. /brɪŋ əʊr ho:l nasɪɔn tu o:n sɜ:tən, pɜ:fɛt and dʒɛnərəl spɛ:kɪŋ/

(14a) の引用符部分は、ハートの著書『正書法 (*An Orthographie* [1569])』からの直接引用である。それをハートの提案する綴り方で綴ると、(14b) のようになる。そして Freeborn による、その当時の発音の再現が (14c) である。その中で、*hōl* /ho:l/ 'whole /houl/, *spēking* /spɛ:kɪŋ/ 'speaking /spi:kɪŋ/, *zeneral* /dʒɛnərəl/ 'general /dʒənərəl/ 等を見ると、文字下の発音弁別符号や創作文字を利用しながら、EModE の発音に忠実に綴られて

おり、一文字一音という彼のポリシーが貫かれていることがよく分かる。

英語史上初の英文法書著者として有名なウィリアム・ブルッカー (William Bullokar [c1530-1609]) は、彼独自の新たな創作文字こそ導入しなかったが、やはり発音弁別符号や母音の組み合わせによって音質や長短を弁別しようとした。例えば、

(15) *sent* /sɛnt/ 'sent', *decræse* /dikrɛ:s/ 'decrease', *bréf* /bre:f/ 'brief' —Freeborn (2006<sup>3</sup>: 314-315)  
 <e, æ, é> がそれぞれ /ɛ, ɛ:, e:/ を表していることが分かる (/ɛ:/ と /e:/ は当時依然として区別されていた)。

そして、16世紀最大の綴り字改革者と目されているのが、教育者であり司祭でもあったリチャード・マルカスター (Richard Mulcaster [c1531-1611]) である。Horobin (2010: 67) が、*“He understood that no writing system could ever be truly phonetic and that the use of a single letter to represent two sounds was perfectly acceptable”* と述べているように、彼は表音的書記体系の限界を十分見極めた上で、教育的観点からより適切な綴り字への変革を目指したようだ。とは言え、

(16) *anie* 'any', *quik* 'quick', *gess* 'guess', *feasant* 'pheasant' —Horobin (2010: 67)  
 上記(16)に見られるような改変は、分けても <gu> → <g> はむしろ古の混乱への逆戻りであり(註14参照)、そうすることのメリットが全く見つけられず、その他の提案も「個人的好み」の域を出ていないようにも思える。ただ、上述のように「完全な」表音的書記体系は存在し難いことを十分に自覚していた点だけでも、彼が他の改革者たちとは一線を画していた証左となる。

続く17世紀以降は、改革というよりもむしろ綴り字の更なる固定期に入り、ある種の諦念も漂い始める。それは、18世紀の、あの有名な『英語辞典 (A Dictionary of the English Language [1755])』を著したジョンソン博士 (Samuel Johnson [1709-1784]) も、*“no spelling system should be adapted to imitate those changes, which will again be changed, while imitation is employed in observing them”* (Horobin (2010: 70)) と述べ、綴り字「改革」の虚しさを熟知していたことから窺われる。

さて、綴り字改革の最後を飾るのは、綴り字そのものをうまく活用するによって、言わば「アメリカ英語 (American English: AmE) のアイデンティティ」を確立したノア・ウェブスター (Noah Webster [1758-1843]) であった。かつてイギリスの植民地であったアメリカに持ち込まれた英語の綴り字を独自のものに変えることは、敵対するイギリスから独立したアメリカのナショナリズム (イギリスとの差別化) を如実に反映することに繋がったからである。<sup>16)</sup> このようにして、語源を闇雲に引きずり、音韻変化による残滓を抱えた、本家本元のイギリス英語 (British English: BrE) の綴り字は、その一部がアメリカという新天地において、下例(17)のようなシンプルで合理的なものに変えられたのだ。

(17) a. OE \**draeht* /dræxt/ > ME *draught* /drauxt/ > ModE *draught* /dra:ft/ > AmE *draft* /dræft/  
 b. OE *burh* /burx/ > ME *burgh* /burx/ > ModE *borough* /bʌrə/ > AmE *boro* /bə:rou/<sup>17)</sup>

ここでは、上例(8)でも議論した <gh> が問題になっており、(17a) のように (*draught* の <gh> を黙字と捉えた /dra:ft/ という発音もあるらしいが) それが黙字でないのならば、該当する音価 /f/ をストレートに表す <f> に変え、一方(17b) のように間違いなく黙字ならば、いっそのこと削除してしまうという、まさに表音的な綴り字を目指したことが分かる。<sup>18)</sup> イギリス本国の BrE ではついぞ為し得なかった、このような表音的綴り字への思い切った改変が、もちろん全てではなく一部ではあるにせよ、いとも簡単にアメリカで実現したという事実を、上記の綴り字改革者たちは草葉の陰でどのように受け取ったであろうか。ただ、Horobin (2013: 200) が、*“The distinctions between American and British spelling are gradually being eroded, as some American spellings introduced by Webster have become more prevalent in British usage.”* と述べているように、その後の AmE の影響力はやはり甚大で、結局 BrE も AmE によって「実質的に」綴り字を変えていった部分も少なくはないのである。

## 5 まとめ

そもそも書記体系は、言語音を保持・記録する媒体であるので、表音的な形でスタートするのはある意味当然であり、英語において標準形が登場する以前の ME 期において、ありとあらゆる綴り字が各地方で跳梁跋扈していたのも納得がいく。しかしその後、社会が成熟していく近世に入ると、一国の国民が共通して使える言語変種の必要性が俄然高まり、ためにどうしてもそこに「共通の」綴り字を設定せざるを得ない状況が生まれた。折りしも印刷という技術革新を利用できる絶好のタイミングにあったので、綴り字の固定化は

一挙に進んで行った。ただ、言語は変化するのが常である。英語という言語の内部から湧き出て来る各種音韻変化、借入語導入による外部から持ち込まれた形態・音韻変化、英語使用者の意図的・人工的な形態・発音改変は、英語書記体系の表音性を瞬く間に奪って行き、夥しい黙字を生産するに至った。こうして見てくると、綴り字を固定する以上、完全なる表音的書記体系の維持などは所詮無い物ねだりであり、どだい無理な相談であったことがよく分かる。

しかしながら、そのような状況下で最終的に発想の転換が生じた。それは綴り字を無理矢理発音に合わせて改変するのではなく、現段階での綴り字をむしろ肯定し、その発音との対応関係の「ありのまま」を具に調べ、そこに一定の「規則性」を見いだそうとしたのだった。所謂「フォニクス (phonics)」の登場である。19世紀に既にその発想自体はあったようだが、本格的に運用されるようになるのは、20世紀半ばの教育現場であった。Crystal (2012: 291) は、“If a child is being taught to read using a phonic method, the approach will instil a sense of the core regularity within the English spelling system.”と指摘している。本稿の主題であるマジック <e> もまた、まさにこの仲間なのである。これはある意味、一旦固定してしまえばおいそれとは変えにくい命運にある綴り字に対する最良の回答であった。将来的にどんなに発音が変化しようとも、それに応じた綴り字のルールを見つけ出せばよいだけのことだからである。ただし、“There is no rule without exceptions.”とはよく言ったもので、全てをルールで制御できるわけでもない。そしてマジック <e> もまたその例外ではないのである。

(18) a. *cove* /ou/, *Jove* /ou/; *hive* /ai/, *live* /ai/; *pave* /peiv/

b. *dove* /ʌ/, *love* /ʌ/, *move* /u:/; *give* /i/, *live* /i/; *have* /æ/

(18a) の CVCe 構造の単語、つまり <e> の前に <v> が現れる CVCe 構造は、マジック <e> に従って <o>, <i>, <a> のアルファベット読みがしっかり実現されているが、(18b) は同様の構造にも拘わらずそれに従わず、短母音や長母音になっている。この短母音 /ʌ/ は、/u/ の音韻変化の結果であり、OE *lufu*, ME *luve* ‘love’ などに見られるように元来は <u> で綴られていたが、<uve> という綴りは、筆記体 (cursive style) で書いたとき縦のストロークがいくつも連続して非常に見にくい。そこで、<u> を <o> に取り換えることによってより見やすくしたのだった (児馬 (2018<sup>2</sup>: 122) 参照)。<sup>19)</sup> 他方 (18b) の *move* は、フランス語からの借入語であり、当時から <o> と綴られていたが、GVS により発音が /o:/ から /u:/ になったのであろう。また、*hive* や *live* では、元の長母音 /i:/ が GVS を経て二重母音化しているが、<sup>20)</sup> *give*, *live*, *have* は元の短母音が維持されたまま、たまたま最終形態として CVCe 構造に落ち着いたのである。これらは、英語史上の紆余曲折がマジックにかからなくしている例だと言える。さらには、

(19) *rare* [rɛəɹ]; *fire* [faiəɹ]; *lure* [luəɹ]; *were* [wə:ɹ]; *tore* [tɔ:ɹ]

(19) に見られるような、<e> の前に <r> が現れる CVCe 構造でも自慢のマジックが効かない。これには、後部歯茎接近音 (post-alveolar approximant) /ɹ/ の母音的な音質 (“flowing vowel-like sound” [Crystal (2018: 160)]) が関係していると思われ、<sup>21)</sup> この環境に生じる /ɹ/ は、BrE では容認発音 (Received Pronunciation) 等の変種で消失してしまい、黙字になったが、AmE では多くの変種において [ɹ] という形で残り続けている。しかもそれを発音することが、AmE においては社会階級的「威信 (prestige)」を表示することに繋がるというのだから、たかが発音と侮ることは全くできない [ɹ] なのである (Trousdale (2010: 19))。

確かにこのような例外はあるにせよ、やはりマジック <e> の有用性は微塵も揺らぐものではなく、結論として、ネイティブ英語話者も外国人英語学習者も、特定の綴り字構造に現れる規則的音韻表示の典型である、このマジック <e> の多大なる恩恵に浴していると言える。

#### 註

- 1) <e> の < > は、e が「書記素 (grapheme)」 (= 綴り字) であることを示す記号である。
- 2) より正確には、CVCe だけでなく、子音結合 (consonant cluster) を持つ、*stone* や *plane* のような CCVCe, あるいは *taste* のような CVCe の構造をとるものもある。また、語頭の子音を欠く、*ape* や *ode* 等の単語や *Abe* (< Abraham) や *Ike* (< Issac) 等の人名通称が持つ VCe 構造も見られる。
- 3) ただし <u> に関しては、アルファベット読み /ju:/ だけでなく、*rule* のように、/u:/ の場合も存在する。ちなみに、(19) の *lure* には、[lɹuəɹ] という発音もあるようだ。
- 4) 導入されたルーン文字としては、/θ, ð/ を表す <þ> ‘thorn’ と /w/ を表す <ƿ> ‘wyn(n)’ があつた。また、ラテン文字改変文字と

しては、/æ/を表す「抱き字・合字」(ligature)の<æ> 'ash' (児馬 (2018<sup>2</sup>: 24))と /θ, ð/を表す <ð> 'eth' (アイルランド字体の <d> にストロークを付加したもの)である。さらに、これは新たに導入された文字そのものではないが、当時イングランドでは、大陸で使用された形状の <g> (カロリング朝小文字体 [calorine minuscule]) は用いられず、そのかわり <ȝ> 'yogh' (島嶼体 [insular script]) が /g, j, x/ の各音を表した (Horobin (2010: 56))。

- 5) この <sc> は、ゲルマン祖語では常に /sk/ と発音されたが、OE では、全てではないが、その大部分が /ʃ/ を表すように音韻変化した。ここでの黙字 <e> は、そのことを示すために取られた手立てと考えられる。<sc> に後母音が継続する scolde /ʃolde/ のような場合、\*/skolde/ という発音も完全には排除できないので、<e> を挿入することによって /ʃ/ であることを明示したのであろう。Smith (2009: 15-16) によると、sceolde は後期ウェスト・サクソン方言によく見られた綴りであった。
- 同様のことは、PSE でも観察される。黙字の <e> がないと、notice + -able の noticeable /noutisəbl/ は、\*noticable /noutikəbl/ となってしまうので、notice の黙字 <e> を維持することで、<c> を /k/ ではなく /s/ で発音することが示されているのである。
- なお、Horobin (2010: 58) は、この無音の <e> が「発音弁別符号 (diacritic)」として働いたとするが、ドイツ語におけるウムラウト符号を使う代わりに <e> を添える方式、例えば、<ö> /ø/ ではなく、<oe> と綴ることに同様の現象を見ることが出来る。Murray (2017: 64-65) は、OE でも一部方言で、<oe> /ø:/ (e.g., cwoen 'queen') が見られたが、後に書き言葉の標準形となるウェスト・サクソン方言では、円唇性が消失し、<e> /e:/ (cwen) になったと言う。
- 6) この場合、もちろん「二重字 (digraph)」である <sc> /ʃ/ や <cg> /dʒ/ は黙字を含む綴りとはみなされない。また、<f>, <s>, <c>, <g> が生起環境によって複数の音素に対応していたことも、厳密な意味では「表音的」とは言えないが、それらの発音が一定の法則 (位置によって発音が決まる) に則って決定されていたことを考慮すれば、やはり OE は十分に表音的だったと言っていいたい。
- 7) 上註 6) でも述べたように、OE では、<f>, <s>, <c>, <g> は、生起環境によってそれぞれ /f, v/, /s, z/, /k, tʃ/, /g, j, x/ という複数の音素を表したが (または、例えば <f> の場合、音素的には /f/ を表すが、その異音 [allophone] として [f] と [v] を持っていたとも記述できる)、ME になって、そのオリジナルの綴り字を固定したままでフランス語の語彙を大量に導入したために、それぞれの音素に対応する新たな書記素が与えられることになった。すなわち、<f> /f/, <v> /v/, <s> /s/, <z> /z/, <k> /k/, <ch> /tʃ/, <g> /g/, <y> /j/, <gh> /ç, x/ である。ただ、別の問題も発生した。<c>, <g> はそれぞれ、OE 期にはなかった /s/, /dʒ/ といった、フランス語の綴りに特徴的に現れる音素を新たに獲得したのである。また、下註 10) でも述べるが、ME 期にフランス語から持ち込まれた <ou> /u:/ は二重字であり、そこでの <o> を <e> のような発音弁別符号と見なすこともできるかもしれない。
- 8) 「権威や能力を投影する」というところに標準形使用者が持つある種の「鼻持ちならなさ」が如実に表れているのではないか。
- 9) Kretzschmar, Jr. (2018: 124) は、前・後母音の調音点がそれぞれ段階ずつ上がる GVS の Phase 1 は 1600 年までに起こり、前母音では、さらにそれからもう一段上がって /e:/ > /e:/, /e:/ > /i:/ となる Phase 2 は 1700 年までに起こったとしている。
- 10) 元来英語では、/u:/ は <u> と綴られていたが、ME 期にフランス人写字生が /u:/ に対応するフランス語の正書法 (orthography) である <ou> を英語に持ち込み改変した。例えば、OE hus /hu:s/ 'house' は ME hous /hu:s/ へと変えられた。フランス語では、<u> は /y:/ (英語では、アルファベット読みの /ju:/ として定着した) と発音されるからである (Horobin (2010: 60))。
- 11) 上述のように特に ME 期には様々な綴り字が存在したので、以下に例示する ME は主に東中部方言形であり、OE に関しては主にウェスト・サクソン方言形である。
- 12) この doubt は動詞なので、OF から借用するとき、OF の動詞 (不定詞) 語尾 -er を ME の動詞語尾 -en に付け替えて取り入れた。ちなみにこの場合、ラテン語の動詞語尾は -are であることから、動詞語尾を削除した \*doubit /daubit/ という形で語源を活かして、ME dout(en) を修正することの方がむしろ正当性があったようにも思える。しかし黙字の <b> だけの挿入に留め、<bi> を避けた理由はおそらく、音節の増加を嫌ったからであろう (この場合、1 音節語から 2 音節語に変わる)。
- また、当該の発音が実際に困難なのかどうかという点に関しては、次の indict が参考になる。
- (i) ML indictare > OF enditer > ME enditen > ModE indict /indait/
- この indict は、古フランス語から借入された当時、<c> は既に消失していたが、その後中世ラテン語に遡って復刻したのである。しかしこの場合、doubt \*/daubit/ とは違って、仮に <c> を発音したとしても、\*/indikt/ となり、その /dikt/ の部分の発音は dictate や diction でも違和感なく聞かれるので、英語として十分に可能である。にも拘わらず、<c> は黙字となっていることから、一連の綴り字修正では発音のことは気にせず、ただ只管語源要素の復活のみに主眼目があったと考えられる。
- 13) 当時の識者たちは、ラテン語を起源とするフランス語にある <s> ならば、英語にもあつてしかるべきとでも考えたのであろう。ここには古典語至上主義が垣間見える (現代の「英語」至上主義とパラレルな思考回路が面白い、劣等感の裏返しと言う他ない)。
- 14) その後工夫もなされた。例えば <g> の場合、発音が /dʒ/ ではなく、/g/ であることを表すために <gu> に置き換えられた単語もある (guess /ges/ vs. gesture /dʒestʃə/)。ただし、get /get/ や give /giv/ は未だに昔のまま <g> が維持され、なおかつ /g/ を表している。
- 15) ハートが創作した、/dʒ/ を表す文字の適切なフォントがないので、本稿では、それに近い感じの <ȝ> で表している。実際には <ȝ> (yogh) を筆記体で書いたような文字である。また、上註 13) では、/g/ を表すために <gu> が導入された事を指摘したが (<u> が発音弁別符号の役割を演じている)、ハートは逆に、<g> は /g/ を表すとし、/dʒ/ を表す文字の方を創作したのである。
- 16) 日本国文部科学省は、日本人が習得すべき英語変種は AmE の標準形としており、日本政府の「防衛省」の英語表記は Ministry of Defense (BrE では Defence) と方針通り AmE 綴りになっているが、「厚生労働省」は Ministry of Health, Labour and Welfare (AmE では Labor) であり、BrE 綴りで表記されている。
- 17) AmE でも borough の綴り自体は標準形で存続しているが、この boro も同様に存在し、ニュージャージー州の郡区名や紙巻

きたバコの銘柄として有名な **Marlboro** に見ることができる。

- 18) 同様のパターンに, **thru** 'through', **enuf** (f) 'enough', **nite** 'night' 等がある. 全て <gh> が絡んでおり, 最後の **nite** は, まさにマジック <e> を有効利用している.
- 19) ModF **trionphe** /tʁijɔ̃f/ は, PSE では **triumph** /traɪʌmf/ である. ラテン語で **triumphus**, さらに OF では **trionphe** であることを考えると, フランス語では <u> → <o> の改変がなされていることが分かるが, 英語では <u> を温存している. これは, (18b) の **dove** と **love** は本来語であるが, **triumph** は借入語であることが改変の有無に関係しているのかもしれない.
- 20) **live** /laɪv/ は, **alive** の語頭音消失 (aphaeresis) 形であり, **alive** はそもそも OE の **on** と **lif** /li:f/ からなる句だった. 接続詞 **on** に対応するため, **lif** が単数与格形 **life** /li:və/ になっており, 語末の <e> が生じているのである (家入 (2007: 36)).  
(ii) **on life** /ɔn li:və/ > **alive** /əli:və/ > /əli:v/ > /əlaɪv/ (> **live** /laɪv/)
- 21) 現代ドイツ語でも以前は, 男性単数主格定冠詞 **der** は /der/ と発音されていたが, 今では /dɛə/ になっていることから, /r/ がこの環境で /ə(r)/ に変質したと考えられる.  
(iii) ME **fire** /fi:rə/ > EModE /fɛɪr/ > [faiə(r)]

### 参考文献

- Baugh, A. C. and Cable, T. 2013. *A History of the English Language*. 6th edition. London: Routledge.
- Cruttenden, A. (rev.) 2001. *Gimson's Pronunciation of English*. 6th edition. London: Arnold.
- Crystal, D. 2012. *Spell It Out: The Curious, Enthralling, and Extraordinary Story of English Spelling*. London: Profile Books.
- Crystal, D. 2018. *Sounds Appealing: The Passionate Story of English Pronunciation*. London: Profile Books.
- Davis, N. (rev.) 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. 9th edition. Oxford: Clarendon Press.
- Everson, M. (rev.) 2009. (A. L. Mayhew and W. W. Skeat's) *A Concise Dictionary of Middle English*. County Mayo, Ireland: Evertyp Publishing.
- Freeborn, D. 2006. *From Old English to Standard English*. 3rd edition. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Horobin, S. 2013. *Does Spelling Matter?* Oxford: Oxford Univ. Press.
- 家入葉子. 2007. 『ベーシック英語史』東京: ひつじ書房.
- 児馬修. 2018. 『ファンダメンタル英語史』改訂版. 東京: ひつじ書房.
- Kretschmar, Jr., W. A. 2018. *The Emergence and Development of English: An Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Mitchell, B. and Robinson, F. C. 2012. *A Guide to Old English*. 8th edition. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Murray, R. 2017. (Old English) Phonology. In L. J. Brinton and A. Berg (eds.), *The History of English*, Vol. 2, *Old English*, 50-72. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Smith, J. J. 2009. *Old English: An Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Trousdale, G. 2010. *An Introduction to English Sociolinguistics*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Upward, C. and Davidson, G. 2011. *The History of English Spelling*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- van Herk, G. 2012. *What Is Sociolinguistics?* Oxford: Wiley-Blackwell.